

針葉樹のカミキリムシ被害

問 土場に積んであるエゾマツ、トドマツ材にカミキリムシが発生して困っています(A署) また購入したカラマツ丸太にもカミキリがはいついて材にひいたら穴だらけでした(B森林組合)。種類と防除法を教えてください。

答 今年のカミキリムシなどの二次性害虫が針葉樹の害虫として目につきました。恐らく昭和56年の15号台風や湿害による倒木などで、これらの害虫が少しずつ増殖し密度が高くなっているからだと思います。針葉樹を加害するカミキリムシは主なものだけでも数種類いられていますが、いずれの種もトドマツ、エゾマツ、カラマツを加害します。

カミキリムシはその一生のほとんどを樹皮下また材部で過ごすため、正確な生態が知られていないのが現状です。ここでは今年になって多く目についたヒゲナガカミキリとマルクビヒラタカミキリについて簡単な生活史を述べ、幼虫での見わけ方を図に示しました。

ヒゲナガカミキリは針葉樹を加害する種のうちでは最も体が大きく、終齢幼虫の頭幅は0.8cm、体長は9cmにもなります。成虫は6～9月に現われ、樹皮にかみ傷をつくり、そこに卵を1個ずつ産みつけます。幼虫は樹皮下を不規則に蛇行してくいすすみ、秋おそくなって材に穿入します。翌々年、また樹皮下に現われ辺材部を渦巻状にくいすすんだのち、渦巻の中心でふたたび材に穿入し蛹室をつくり、そこで成虫になります。ですから2年に1回の発生となります。

マルクビヒラタカミキリはヒゲナガカミキリとくらべるとかなり小さく、終齢幼虫の頭幅が0.5cm、体長は2.3cmです。成虫は6～8月に出現します。幼虫は樹皮下を不規則に蛇行してくいすすみ、秋に材に穿入します。そして翌春になって蛹化、成虫になるものと思われまます。

これらカミキリムシは、幼虫が材に穿入する以前の8～9月に剥皮するか、または有機りん系殺虫剤の油剤を散布すれば幼虫を殺すことができます。しかし適期をのがし幼虫が材のなかにはいつてしまうと防除は不可能です。むしろ、翌年の土場積み丸太や周囲の生立木への被害蔓延をふせぐことの方が大切です。スミパイン乳剤100～200倍液を成虫の出現期に丸太表面に散布しておく、十分な予防効果があると思います。

(昆虫野兎鼠科 鈴木重孝)

